

「準備はできていますか？」

～主の前にいつでも心が備えられているように～

「絶えず感謝の心を持って祈り、どんなことにも臨機応変に対応できるようにしなさい。」

コロサイ4章2節 [アライブ訳]

パウロはコロサイ書4章2節で上記のように語りました。ギリシャ語で「προσκαρτερέω プロスカルテレオ」という言葉が使われていますが、これは「用意されている」と訳される言葉ですが、他の聖書箇所では、「もっぱら」とか「つねに」とかとも訳されています。私たちの信仰は、祈りによって整えられるのですが、それは「不断の祈り」というか、「祈りの生活」の中で整えられるのです。神さまへの祈りが何か特別な宗教行為ではなく、普段の食事や睡眠のように当たり前の常日頃からなされる行為として位置づけられているということです。そうした上で初めて、私たちの主への信仰が備えられるとパウロは教えたかったのではないかと思います。

皇位継承の重要な儀式である「大嘗祭」が行われました。信毎には「令和の大嘗祭 議論なきまま」とタイトルが書かれていましたが、公費で24億円以上使って神道行事がなされたことは、憲法違反であるという明確な状況があったにも関わらず、また、当事者の弟君である秋篠宮様が要望したにも関わらず、宮内庁が聞く耳を持たなかったという今の政府が強引に推し進めた結果となりました。天皇皇后や上皇陛下ご夫妻もおそらく複雑な想いを持たれておられることと思います。この問題は、キリスト教界独特の議論ではなく、一般的な世界で語られている内容であることを私たちクリスチャンもきちんと意識していないといけないと思いました。今の政府、自民党がちょっと行き過ぎているということです。左翼的なグループが今の右翼的な政府に対して対抗して苦言を呈しているということだけではないと思います。教会は信仰と憲法、現状の政府の立場などについてどのように理解すべきなのか、宗教と政治については触れない方がよいとはよく言われますが、語ることは中々できなくても、祈ることはできると思います。私たちもある程度確信を持った立場を貫いていない限り、強い意見で政治を主導されたら、ただ引きずられるだけになってしまう恐れがあります。

「目を覚まして感謝の内に祈り続けなさい」とパウロは語ります。イエス様もお語りになりました。心の目を覚まし、信仰の目を覚まして、常日頃から祈りの内に、主の御心を受け止めていく必要を感じています。

これからの世代の子どもたち、若者たちにしかるべき環境を造っていくのが私たち大人の責任でもあります。激動する社会、自然環境を意識しながら、皆、苦慮しています。自分だけ、自分の時代だけ良ければいいとする腐った考え方は現実としてありますが、それでも、立ち止まって、強い流れを変えようとする努力ができないかと思います。主はこの時代に、この現実にとどのように私たちを用いようとされておられるのか？共に祈り進みましょう！